
和も洋も甘いもの

琉兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和も洋も甘いもの

【Nコード】

N3816Z

【作者名】

琉兔

【あらすじ】

家が向かい同士の僕らは、必然的に仲が良かった。でも、親同士の仲は最悪だった。僕らの実家はともに老舗の菓子屋。違うのは和菓子屋か、洋菓子屋かの違いだけ。僕にはどちらも同じ甘いもの。ねえ、僕はいつまで君の隣にいられるの？*同じく琉兔が書く『夕日よ昇れ』に出てくる青葉淳と三王静香のお話です。それにより『夕日よ昇れ』とも多少リンクしたところがあります。

* 0 * (前書き)

前々から書きたいと言ってきましたが
ようやく方向性が決まったのと

『夕日よ昇れ』がひと段落ついた&恋愛突入できる
というところまできたので
淳と静香のお話を投稿します。

が、おそらく更新は『夕日』の方優先なので
結構遅く更新してきます。

小さい頃から家が向かい同士で、良く遊んでた。一つ違いの幼なじみ。でも、歳の差なんてそんなもの、有って無いようなものだった。

でも、いくら子供達が仲が良くても、親まで仲が良いとはいかなかった。顔を合わせると空気が変わる。意識して無いようで、実はライバル心を燃やしている。どうしてそこまで対抗心を燃やすのか、僕には理解できない。そもそも、僕にもそれを押しつけるのではないとおもう。なんでって、思うんだ。

僕の家は老舗和菓子店。もうかれこれ何百年も店を構える。僕はその5代目。そして幼馴染の家は、洋菓子店。こちらも結構長い間店を構える、老舗。和と洋。全然違うジャンルなのに。なぜそこまで対抗し合うのかわからない。どちらも同じなのに。僕にとっではどちらも同じくらい好きなのに。

でもいがみ合っているのは親たちだから、僕らも同じようにしなければならぬなんてことないよね。

ねえ、淳。僕らはずっと、このままでいられるのかな。いがみ合わず、対立し合ったりもせず、僕は君の隣にいられるのだろうか。

* 0 * (後書き)

ありがち。

幼馴染で、家向かい（隣とか）で、お家がライバル同士とか。

こちらもいろいろお家関係でいろいろありますね。

静香視点で主に進んでいくと思います。

たまに淳もあるかもしれませんが。

こちらにもたまに『夕日』のキャラも出てきますので。

*** 1 * (前書き)**

基本、静香視点で書いていこうと思います。

朝日がカーテンの隙間から、温かな光を注いでいる。それでもまだ、どこか冷え冷えしたそんな初春のある朝。目覚ましがなる5分前に目が覚めてしまった僕は、そのまま枕元にある携帯を取った。布団の上で体を起こし、電話をかける。朝が苦手じゃない人など、僕の知り合いの中には一人もいない。電話の相手ももちろん苦手なようで、僕はそんな相手に起こしてくれと頼まれた。つい昨日の事だった。ぶるるるる……と、相手を呼ぶ。何回くらいそれが繰り返されたらうか、ようやく相手が出た。

「静……香……早くね?」

「早くないよ。これくらいに起こさないと、淳は朝さ、亀みたいなんだもの」

「亀って……」

「亀みたいなのろろしてるって意味。今日、朝礼の準備なんですよ? さつさと起きて、支度しなよ?」

「んあ〜……静香、はよう」

「うん、おはよう。じゃ、僕はまだ時間あるから二度寝するけど、頑張ってる」

「ひっでえ……わかってるよ、じゃな」

「うん……」

電話はそして切れた。僕は携帯を閉じると、握ったまま再び布団に倒れる。でも、眠れない。淳が頑張ってる起きて行ったのだから、自分だけまた眠るのも嫌だった。なんて、ただの自己満足といえばそうかもしれない。ふと、携帯を上に掲げてみる。そこにつけられたストラップが揺れる。男でストラップなんて、それにましてやお

菓子がついてるストラップなんてどうかとも思われるかもしれないけど。これが僕の気持ちだと思う。

マカロンと、大福。僕と淳みたいだと思う。ころころ変わる表情。天真爛漫で、とつてもカラフルな淳。まるでマカロンでしょ。そして僕は太福。イチゴ大福だったらなおさらいい。真っ白で一見なんてことはない普通の人間だけど、そのうちには真っ黒で甘い想いが詰まってる。ふふふ、僕って意外と腹黒いんだって。そうかもね。嫉妬深いし、独占欲強いから。イチゴ大福なら、その真っ黒なさらにその奥に、甘酸っぱいほんとの思いが秘められてるのかもしれないってこと。なんて、ほかの人が聞いたらおかしいって思われるし、理解されないかもしれない。けど、少なくとも僕はそう思ってるってわかってくれればいいかな。

雑貨屋で見て思わず買ってしまったストラップ。でも今は大切な僕の一部みたいで、後悔はしてない。こんな隣にあることに違和感があるお菓子たち。でも、隣でゆらゆら揺れていられるっていいなっと思う。僕も、こうしてたい。

「淳、お願いだから……出来る限りでいい……時間が許す限りでいいから……隣にいさせて」

僕はゆっくりとベットから抜け出した。

* 1 * (後書き)

イチゴ大福って、ピンクのもありますよね。
でも私が好きなイチゴ大福は真っ白なやつで、ほんとうにおいしいんです。

淳は正直難しいです。

マカロンのようでそうじゃないような……

勝手なイメージなので、悪しからず……

*** 2 * (前書き)**

更新遅くてすみません。

なかなかあちらが楽しく……こちらのお話が浮かびませんで……
あちらを優先してるので仕方がないと思っていただきたいと思います。

黒板に白い文字が、どんどん書き連ねられていく。僕たちはただそれを自分なりにノートに写していく。今は世界史の授業だ。でも正直僕はそんなに好きじゃない。過去の事を学ぶのは大事だけどね。なんか、虚しくなる。この時この人はどんな気持ちだったんだろうと、ふとそう思ってしまうから。

授業が終わるまであと30秒。今日も1分持たなかったねと、前の席で寝ている奴の背中をペンの先っぽで突く。チャイムが鳴ると同時に起きた彼はそのまま起立、礼をした。全く、学校になににきてるんだらうね。こんなやつがこの学校の生徒会長だというんだから驚きだよ。

「ふわ……静香、今日どこまで進んだ？」

「アメリカ独立宣言。教科書86ページ15行目までだよ」

「了解くんじゃおやすみ！」

「清桜……」

少しはまじめにノートを取ろうって気がないんだろうか。前そう聞いたら別に先生はどうノートをまとめると言っではないんだから、後で独自にノートを作るからいいと言っていた。そういう彼のノートの評価はA+なんだからむかつくなあ。いいんだそれでも先生。

「最近忙しいの？もうすぐ修学旅行じゃん」

「まーねー。だから授業中が一番寝れる時間なんだよ」

「それもどうかと思うけど。なんなら淳に手伝わせれば？淳書記でしょ？書記って何か仕事あるの？」

「あんまりないと思う。だから、良介に俺の手伝いはすでにさせら

れてるよ」

「あ、そうなんだ。え、それでも会長って仕事多いの？」

「まあ……うん……」

あ、今何か口を濁したな。そういうのって何かわけあったりするんだよね。もしかして。

「会計君の仕事少し請け負ってるとか？」

「……」

「そっかー。そうなんだあゝへえゝ」

「ちよ、俺何も言っていないじゃんか！」

あ、飛び起きたし。凶星か。清桜には大切な子つてのがいるって前に聞き出したことがあるんだ。だって、あの顔で周りからキヤーキヤー言われてるのに、笑って流すだけなんてほかに誰かいるって思っるのは当然じゃんね。僕そついうのすごく気になるんだから聞いたら、「居るんだ、何にも代えがたい大事な子がね」だってさ！うはっ、つてなつたのは言うまでもないね。いいな、僕も淳にそういうこと言っほしい。で、この学園において会計してるって言うのは聞いてただけど……僕まだ一度もあつたことない。そこまで清桜が気に入ってるなら相当のかわいい子だと思うんだ。あ、男の子だけどね。この学園男子校だし。男装してまぎれてるなら別だけど、清桜も男だつて言ってたしね。いいなあ、可愛い男の子。僕も会いたいな。子猫な感じだったらさらにいいな。見た目がだけどね。僕は意外とかわいい系が好きだったりする。え、淳はかわいいのかつて？たまにね、可愛いなつて思うよ。子猫な感じじゃないけどね。それとこれはなんていうか別？つて感じ。

「ねえねえ、今日生徒会室行ってもいい？」

「来て何するの？」

「淳に会いに」

「……本当は？」

「清桜のお気に入り君に会いに！」

「ダメ！絶対にダメ！」

「えーなんでだめ？」

「静香あつたらすぐに抱きつきそうだから。俺でも最近抱きついてないのに」

「へえ、そんなにかわいいんだ。淳に連れてきてもらおっかなあ」

「拉致！？」

「監禁はしないよ」

ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ！

ポケットに入れていた携帯が鳴り、楽しい清桜との会話を一時中断する。メールが来た。差出人は……淳か。

「はいはい、わかったよ」

「淳？」

「そ、お昼一緒に食べれるって返事。清桜は？そのこと食べないの？」

「俺昼休みも生徒会室にこもるからね。購買でパンかってそれ片手に」

「がんば。僕も購買だからなんかおごってやるっ」

「えらそ」

今日の屋上はきつと、初夏のさわやかな風が吹いてるだろうな。

* 2 * (後書き)

淳どこ行つた？

清桜が出しゃばってすみません。

夕日よ昇れじゃ清桜たちの授業風景がでないので

こちらでそういうのも載せられたらいいと思います。

時期的には夕日よ昇れの修学旅行前です。

こうしてみると、会長の頑張りがわかると思います(笑)

次回は屋上でやっとなと静香が絡みますね。

やっとな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816z/>

和も洋も甘いもの

2011年12月29日12時45分発行